

# 金属活字印刷だけじゃない



活版印刷に必要な活字を県内で唯一、鑄造している会社がある。1919年創業の築地活字(横浜市南区)だ。温かみのある活版印刷を名刺制作に生かしたり、インテリア用として活字を使ってももらったり。コンピュータによる印刷が主流になっても、技術を守り続けている。

かつては書籍や新聞業界も活版印刷が主流だった。活字を組み合わせて「版」を作り、インクをつけて紙に印字する。そこで使われる一文字一文字を、型に金属を流し込んで作っているのが築地活字だ。平工希一社長(63)が幼いころは「最寄りのバス停で降りた全員がうちの会社に来

## パソコン時代に鑄造の技守る・築地活字

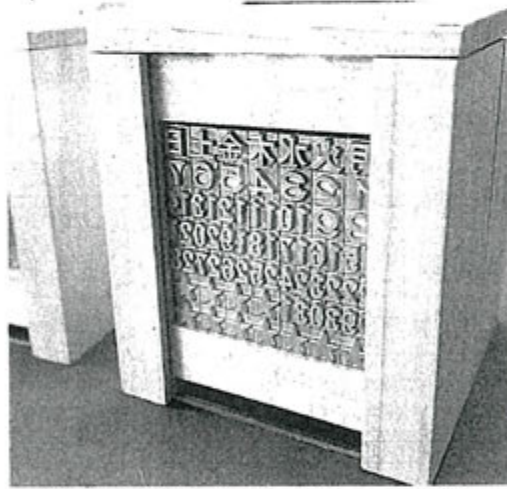


活字を持つ平工希一さん。棚には様々な書体、大きさの活字が収められている

た」というほど繁盛した。しかし、パソコンやプリンターの登場で活字の需要は激減。40歳のころ、父親から5代目を任された平工さんは動いた。一文字ずつ業者に卸していた活字を、「ひらがな」や「カタカナ」のセットにして一般向けに販売したところ、百貨店や書店でも置いてもらえるようになった。

活版印刷で作る名刺は若いデザイナーなどの口コミで評判が広がり、一時、売り上げの3割を占めるほどに。だが、コロナ禍の影響で需要は減少し、「底辺を見ました」と平工さん。多いときで月20件ほどあった名刺関係の受注は、2件ほどまでに減った。そんな時、金属活字を木箱に入れて万年カレンダーにする案が地元企業から寄せられた。活字の材料は鉛とスズ、アンチモン。小さな文字も表現する繊細さとスズを入れることで生まれる上品な輝きがある。平工さんはこの提案に乗ることにした。

金属活字を使ったカレンダー。月ごとに活字を組み替え万年カレンダーとして楽しめる。いずれも横浜市南区



金属活字を使ったカレンダー。月ごとに活字を組み替え万年カレンダーとして楽しめる。いずれも横浜市南区

印刷に使うのではなく、見て、触って楽しんでもらうための活字。カレンダーは3月から始めたクラウドファンディングの支援者に返礼品として提供している。これまでに13人から寄付があり、手に取った人から「面白い」「かわい」と考えている。(土居恭子)

活字の活字はこの道60年以上の大松初行さん(78)が鑄造している。350度を超える金属の液体を扱うため、常にやけどの危険と隣り合わせの作業。土台となる部分のちょうど中央に文字を配置するのが特に難しく、不ぞろいだ、印刷する際に文字列ががたつき見栄えが悪くなる。大松さんが鑄造した活字は寸分の狂い無く文字が並ぶ。

築地活字 社長の平工希一さんと活字鑄造職人の大松初行さんの2人体制。名刺印刷は片面100枚で7700円(税込み)から。金属活字のセットは明朝体3号平仮名が1万6700円(税込み)など。営業時間は午前8時半から午後5時。定休日は土日祝日。横浜市南区吉野町5丁目28の2。電話045・261・1597。

業 多シぶ取司の11汗「22奇音」

業する老舗酒店の2階を宿にした「酒宿山田屋」など

ト 想